

彝族の宗教職能者と治病儀礼

志賀 市子[※]

本稿は、「漢族と周辺諸民族における民俗宗教の比較研究——納西族と彝族と日本の民俗宗教の比較民俗学的考察」の平成7年度における調査のうち、主として彝族の宗教職能者と彼らの行う治病儀礼の部分についてまとめたものである。彝族の調査は四川省涼山県彝族自治州において、9月22日から26日までの5日間に渡って行われた。複数の調査者が一つの班を構成し、通訳を交え、共同で聞き取り調査を行った。我々の調査班が主として担当したのは彝族の宗教職能者と宗教儀礼についてである。同じ調査班に参加していた丸山氏の論稿がピモと葬送儀礼に焦点をあてているのに対し、本稿は、祭司職としてのピモ及びスニと呼ばれるシャーマン的な職能者、そして彼らの行う治病儀礼に焦点をあてている。しかしながら、インフォーマントは同一のため、内容には重複する部分もある。混乱を避けるため、同一のインフォーマントに関しては注を付しておいた。彝語の表記に関しては、原則として聞き取った音をカタカナにし、その後ろに漢字表記を付け加えた。

1. インフォーマント

本稿が基にしているのは、次の5人のインフォーマントからの聞き取り調査である。

- A. ワシュタチュ氏 (瓦西当曲), 男性50歳, 農民。1995年9月22日午後, 三河村で聞き取り調査。白彝。家族構成は妻(42), 長男(20), 長女(19), 次男(17), 次女(15)。この時, 彝語から漢語へ通訳を担当したのは摩瑟磁火氏¹。
- B. ジクニャニャ氏 (吉克良良), 男性50歳, ピモ。1995年9月23日午後, 覺洛郷瓦俄村で聞き取り調査。白彝の家支, 7代続いたピモの家柄で, 13歳の時父と兄について学び, 17歳でピモとして独り立ちした。この時の通訳は勒革楊日氏²。
- C. チムジウ氏 (曲木吉烏), 女性, 55歳。1995年9月26日午前巴普村で聞き取り調査。による。チムジウ氏は覺洛郷生れ。25歳で結婚, 28歳, 最初の子供が生まれる時, 巴普村に移ってきた。夫(49)との間に長女(28), 長男(25), 次男(23) 次女(20) 3男(17) 4男(13) がいる。この時の通訳者は馬爾子氏。
- D. ヴォルジグ氏 (俄爾吉克), 男性, 59歳, 農民, 時にはスニとして儀礼を行う。1995年9月26日午後, 巴普村で聞き取り調査。俄爾姓は白彝, 古侯系統の古い家支。通訳者は摩瑟磁火氏³。

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

2. 病因論と鬼

1) チムジウ氏 (女) からの聞き取り。

病気になるのは、一般に、死んだ人の魂が鬼に変化して生きている人にとりつくからだと考えられている。たとえば、癩病は癩病で死んだ人が変化した癩病鬼ヌシ (洛死) がとりつくことによって、天然痘は天然痘で死んだ人の魂が変化したワスママ (瓦死馬麻) という鬼によってひきおこされる。このように病気は同じ病で死んだ人の魂が変化した鬼がとりついたためだと考えることが多い。通風を引き起こすスアル (絲爾), スリン (絲領) という鬼は、黄や紅の衣類をつけているとされ、同じ色の服を着た人にとりつきやすい⁴。この他、水死者など非常死の場合は、ビズ (比日) という非常死による死者の魂が変化した鬼がとりついたためと考えられている。また女性が妊娠すると、ニジ (里日あるいは尼日) という鬼がとりつきやすいので、あまり歩き回ってはいけないとされている。

以上あげたのは誰にでもとりつく鬼だが、この他に血縁の者にしか影響を及ぼさない鬼もある。たとえば難産を引き起こす女鬼モチュジシ (莫却惹色) は、子供を死産し、その後すぐに亡くなった母親の魂が変化した鬼で、血縁関係のある女性にとりつき、影響を及ぼす。血縁関係のない女性には影響を及ぼさない。モチュジシは非常におそろしい鬼で、自分が育った洛覚村にも、このモチュジシに苦しめられた家があった。話者が13歳頃、シャマ (沙馬) という姓の家で、父親の代に妻が難産で死に、その息子の代になってからも妻が難産で死んだというケースがあった。

家族が病気になってなかなか治らない場合、ビモヤスニといった宗教職能者呼んで儀礼を行ってもらう。病気を診る時、職能者はまず卵を使って病気の原因を占い、次に羊の肩胛骨を使ってどんな犠牲を用いるべきかを占う。

3. ビモの治病儀礼

1) チムジウ氏 (女性) からの聞き取り

一番上の娘が2歳のとき病気にかかり、ビモを呼んで儀礼をやってもらったことがある。このときビモは占トを行い、犠牲として2匹の豚と一匹の鶏を用意させた。さらに、子供の病気を引き起こした鬼が何であるかを説明した。病気の原因となった鬼のうち、主なものは次の通り。①ニジ (里日あるいは尼日)。未婚で夭折した女性に変化した鬼、②ニヅ (里次)、鬼の総称。③ダク (得克)。火傷で死んだ子供の魂が変化した鬼。④スアル, スリン (絲爾, 絲領) 通風鬼。通風で死んだ人の魂が変化した鬼。

2) ビモ, ジクニャニャ氏からの聞き取り

ジクニャニャ氏は、6日前、瓦俄村の第4組に住むチムラコ (曲木拉古) 氏 (34歳) から頼まれて「ニョツズ」という駆鬼儀礼を行った。チムラコ氏は喉の痛みと咳、咯血などの症状を訴えた。

ジクニャニャ氏はまず卵の占トを行った。卵を病人の全身にこすりつけ、卵の殻に穴を開けて

病人自身が息をふきこむ。そして水の入った椀に卵を割り入れ、様子を見る。このときは卵の両端の泡から液体が細い糸のように流れ落ちていたため、ニジ（尼日）という女鬼がついているとわかった。ニジとは3歳から7歳の少女が死んで変化した鬼である。病気の原因はニジだと伝えると、病人はそういえば最近死んだ妹が夢によく出てきたと言った。彼の妹は23年前、兄と同じ症状（百日咳）のため4歳で亡くなっているという。そこでニジビ（尼日比）—— 駆女鬼の儀礼が行うことになった。

儀礼で用意するものは次の通りである。①豚一頭、②神枝12本、そのうち葉のついている枝（ジエゴ）6本、葉のない枝（グジェ）6本、③木枝でつくった矛（スンヂ）7本、④木でつくった鉤（ガンゴ）、⑤平たい籠にいっぱい入れた木塊、打鬼に用いる、⑥木板でつくった鬼牌3個。鬼牌には、竹根、羊毛、草（魂草）、紅糸、緑糸を母麻（実をつける麻）で5回巻いてしばりつける。⑦ニジブ（尼日布）、ニジをかたどった30cmくらいの高さの草鬼で、黄と紅布で作ったスカートと白布の上着を着せ、頭には黒布で作った頭巾を被せる。普通は泥で鬼の顔を描くが、この時は描かなかった。

儀礼は夜8時頃から開始し朝までかかる。儀礼の過程は次の通りである。

- ①アルツアース（爾擦蘇）。除穢儀礼。
- ②浄化のためソモム経を誦す。
- ③モサム（莫色木）口誦経。儀礼の当事者とその家族の名前、儀礼の主旨などを神霊に報告する。
- ④モセ（木色）。請神儀礼。山神、水神、岩神、原神（野原の神）を招く。神が裁判官として人と鬼の間に立って裁判、鬼が悪いことをよく言って聞かせる。
- ⑤ディヴィ（迪偉）という鬼の来歴についての口誦経を唱える。ここで唱えるのは、とくにツヅニジャという女鬼の始祖の来歴である。ツヅニジャは、温かい家庭に育ったが、行方不明になって死んだ少女の鬼である。
- ⑥へ。生きている豚を病人の頭の上で時計周りに3回まわす。豚を病人の身体に3回こすりつける。豚を殺し、戸口の横に頭を外側に向けて体の側面を下にして寝かせる。
- ⑦ニヒエ。3つの鬼牌を犠牲の豚の尻尾のあたりにたてかける。外をかけずまわっている草鬼の魂を呼び寄せ、鬼牌に憑かせるという意味。
- ⑧モジュベ。鬼牌に向かって献酒、献糧食を行う。
- ⑨ブシュム。豚肉を切り分ける。頭、鼻、尾、前足の爪、肩胛骨、右の肋骨は草鬼にやる。
- ⑩ズーフ。豚の脾臓、肝臓、腎臓一つをビモの12種類の守護神に捧げる。守護神は12本の神枝で象徴的に表されている。ビモの守護神には、ビモの祖先神、天父、地母などが含まれる。
- ⑪ラジシ（拉以西）、献茶儀礼。豚のスープを神座に捧げる。ラプラバ茶の来歴について書いた献茶経を誦する。豚の頭も神座に捧げる。この後、参加者は肉を食べる。ビモは鬼板を作り、外に向かって投げる。一種の占トである。鬼板の先が内側を向いていた場合は、鬼は出て行きたくないという意味である。普通は3回投げてみる。4、5回投げても内側を向いているようなら、儀礼は効果がない。

- ⑫木枝で作った矛，鉤などの武器で鬼板をたたく。これは打鬼の意味である。その後矛，鉤を草で鬼板に結び付ける。
- ⑬リョツジュトウイハ，鬼を咒す。この頃ようやく夜が明けて来る。
- ⑭チェゴラグジャ。焼いた石を茶（スープ）の中に入れ，スープを暖めて神に捧げる。
- ⑮ヂュピトウ。寝ている神を起こす。
- ⑯ミンジュズゴピエ，すべての神に到来を願い，人と鬼の間に立って，裁判をしてもらう。口誦経を唱える。
- ⑰誦経。ニュツオホバピユという鬼の来歴を説く経を唱える。
- ⑱誦経。ルトウヘボボパという法器の来歴を説く経を唱える。
- ⑲誦経。ビボビパというピモの来歴と系譜を説く経を唱える。
- ⑳ヅケ。断鬼根の儀礼。鬼の食べ物など鬼に関するすべての物を木でつくった鬼房に入れる。
- ㉑ネネゴ。鬼を呼び寄せ，鬼牌に付ける。
- ㉒チャシャ。鬼に御飯を食べさせる。
- ㉓モマ。鬼に路を指し示す。鬼を，モンプロコという鬼の祖先が集まっているとされる場所（雲南の方角）に送る。
- ㉔ヴェレコ。請神し，鬼を追い払う。12本の神枝を鬼の行った方向に置き，その上に石で重しをする。こうすると鬼は二度ともどって来ないと考えられている。
- この儀礼を行った後，チムラコ氏の病気は好くなった。

4. スニの成巫過程

スニ，ヴォルジグ氏（59歳）からの聞き取り

ヴォルジグ氏は，21歳の時，性格の不一致，子供が生まれえないなどの理由から最初の妻と離婚した。その1年後，22歳で後妻をもらい，4人の子供が次々と生まれたが，みな幼くして病気で死んだ。33歳の時，妻が出て行き，11年間の結婚生活に終止符を打った。それ以来，四肢のだるさ，めまい，夜手足が震えるなどの症状が出るようになった。病院に行ったり，ピモに見てもらったりしたが効果はなかった⁵。

彼の病気を診たピモは，これは特に不吉な病気だと言った。ピモが行ったのは，ヅチという治病儀礼である。ヅチは儀礼の名前であると同時に，癩病の治病儀礼などでも祀られる鬼の名前で，9つの頭を持っているとされている⁶。その時の儀礼過程は次の通り。①山羊を用意する。②草でヅチ（草鬼）をつくる。③ピモが草鬼に対し咒を念じる。④ピモが草鬼をもっているりの周りを3回まわる。⑤山羊を殺して解体し，肺臓を取り出して鬼に食べさせる。⑥草鬼を屋外に捨ててくる。

いろんなことを試してみたが，効果はなく，症状は5年ほど続いた。この頃からピモが占いをしているのを見ると，自分でもやってみたくなったり，何か言ったり歌を歌いたくなったりした。

病気になってから，彼はよく夢を見た⁷。だいたい雲が漂っていたり，空中を浮遊している

ような夢だった。またある日商売で雲南に出かけた折、夜を明かした洞穴の中で鬼を見たことがある。突然雲つくような、全身真っ黒の大男が現れ、麵のようなものを彼の前に投げ出した。彼はそれをとろうとしたがとれない。しばらくしたら、その大男はその麵のようなものを持って山の向こうのアルノチというところに行ってしまった。それからその鬼には遇っていない。

そのうち親戚の者がこれはアサ（阿薩）がとりついたのでないか、ピモにアサを祀ってもらえと言い出した。自分ではアサが憑いているというような意識はなかった。ただ、何か言いたくなるだけだった。37歳の時、去覚比爾という場所の有名なジクジョグ（去克紹古）というピモを呼んでアサトウ（祭阿薩）を行うことになった。その時行ったアサトウの儀礼は次の通りである。①ツジシプサ。屋外に木枝を挿し、神枝図をつくる。②羊皮鼓を用意する。近隣のスニゴボというスニ（男）が作ってくれた。③ピの開始。除穢のため、神枝図の中を通る。口、手、脚のけがれを払う。その後、家の中に入る。屋内には杉枝を挿しておく。用意するものは、水2碗（雄と雌——別々の川から汲んできたもの）、蕎麦、米、小麦でつくった粳、白酒、水酒（とうもろこしなどで作った酒）、犠牲の羊。羊は儀礼の前にしめ殺しておく。④ピモは羊皮鼓を持ち、経を唱えアサを呼ぶ。するとヴォルジグ氏は全身が震え始めるのを感じた。これはアサが来た証拠だという。他にはだるいような、力が抜けたような感覚もあった。⑤しばらくすると、彼は突然ピモから羊皮鼓を奪い、口で羊の口にかみつき、羊を持ち上げた。そして激しく踊ったり、天井まで届くほど高く飛び跳ねたりしはじめた。まわりの人は外部に知られるのを恐れて彼を押さえ付けた⁸。

以上のアサトウ儀礼を行った後、彼の病気は少しずつよくなっていった。ピモはこのとき、いつもは持って帰るはずの羊の頭や皮を持って帰らず、彼のために残していった。彼はそれ以来羊皮鼓を家の中にかけておくようになった。これは正式にスニになったことを意味している。

ヴォルジグ氏にとってアサとは、初めてスニとして儀礼をおこなった時、心の中に思い浮かんだ近い死者を指している。彼にとって最も大切なアサは1967年に首吊り自殺した7歳年上の兄である。アサが憑いているとき、彼の心の中には兄のことが思い浮かび、兄に呼び掛ける。4歳で死んだ娘のことが思い浮かび、「ニョニョ」（小さな女の子の意）と呼び掛けることもある⁹。

ヴォルジグ氏の祖先や親戚にはスニはいない。彼が初めてスニになった。祖先に世襲ではないピモ（スビとも言う）¹⁰がいたらしい。

5. スニの治病儀礼

1) ワシュタチュ氏からの聞き取り

1991年、ワシュタチュ氏は通風がひどくなり歩けなくなった。病院に行って薬をもらい、注射してもらったが、もっと悪くなってしまった。どうしようもないのでスニを呼んだ。この時呼んだのは、三河村から70から80キロくらい離れた美姑県柳洪地区に住む女性のスニで、名前はオムモ（俄木莫）といった。俄木は家支名（白彝）、莫は女性の意である。年齢は50歳くらい、この一帯では割合有名で、オンモスニと呼ばれている。服装は一般的な彝族女性と変わらないが、

羊皮鼓を持っている。

オンモスニは病因をつきとめるために、卵を使った占トを行った。そのやり方は、①卵を病人の体にこすりつける。②病人が卵に息を吹き入れる。③よもぎの葉で卵に水をかける。④水の入った椀に卵を割り入れ、形を見て病気の原因を知る。占トの結果、ワシュタチュ氏の場合は、父方の先祖のビズ（比日——非常死による死者の鬼）が憑いているとわかった。

治病儀礼は夕方暗くなった頃から開始し、徹夜で行われた。儀礼の際は、草鬼を作らなければならない。スニは草鬼の作り方を知らないので、ビモに作ってもらう。草鬼はだいたい家の高さと同じくらいの高さで、胸のところに紅と黄の布をまく。この時用意したのは、チャノ（家諾——眩暈を引き起こす鬼）、スアル、スリン（皮膚の痛み、四肢のだるさを引き起こす鬼）、ニジ、アサ（四肢のだるさ、皮膚病をひき起こす鬼）だった。

儀礼の過程は次の通り。①犠牲（山羊、豚、鶏）を用意する。手伝いの人が、生きている犠牲を持ち、座っている病人の患部にこすりつける。②病人が犠牲の口に息を吹き入れる（悪いものを家畜の中にいれてしまうという意味）。③犠牲をそれぞれ病人の頭の上で7回旋回させる。④犠牲を殺す。豚の肺の部分进行細かく切り、血をつけて草鬼に食べさせる真似をする。⑤スニが羊皮鼓をたたき、踊りながら神懸かる。身体が震え、武術をやっているような感じである。スニは踊っている間中ぶつぶつと唱えごとをする。その内容は、「請阿薩降来」（アサよ、降りて下さい）という意味の言葉も混じっていた。アサとは、彼女の息子が死後変化した守護神のことらしい。スニはアサの他に、山神（ポセ）、地神（ムセ）の名も呼んでいた。⑥草鬼を門戸のところに出す。同時にいろりの火種をすくい、いっしょに門の外にはおり出す。これは草鬼を焼くという意味である。⑦山上あるいは南北の方角に草鬼を送る。どこに送るかは病人の命功によって決める。儀礼はこれで終了。報酬としてスニに対し、羊皮と酒、路銭の10元を渡した。

ワシュタチュ氏は儀礼の間不安で落ち着かなかった。病気は治ってほしいが、もし治らなかったら、用意した山羊や豚や鶏が無駄になってしまうと思ったからである。儀礼を終えた後、すぐに夢を見た。夢の中には2人の鬼が出てきた。1人は「おれは行くぞ」と言って行ってしまった。もう1人は一緒に遊んだ。鬼は「もっと遊びたいな」と言った。その後はすぐに起きてしまい、はっきり覚えていない。

2) チムジウ氏からの聞き取り

3番目の息子が3歳の時、下痢と嘔吐がひどく、スニを呼んで治病儀礼を行ったことがある。この時呼ばれたスニは先ほど紹介したヴォルジグ氏である。ヴォルジグ氏はそれほど有名なスニではないが、近所（巴普村5組）に住んでいるので彼女はよく知っていた¹¹。儀礼の前にヴォルジグ氏は卵の占トを行った。その結果、ダク（得克）が子供の体に憑いているとわかった。

儀礼は夜8時頃から開始し、だいたい3時間くらいかかった。犠牲として小豚を用意した。儀礼の詳細はよく覚えていないが、チムジウ氏の印象に残っているのは次のような天である。スニはよい音をたてるように羊皮鼓を火であぶっていた。スニは、スニの神であるアサの到来を願う。

アサは山神、森林神、祖先神、死者の守護霊などさまざまな神霊を含む。よいアサもいれば、悪いアサもいる。このスニ（ヴォルジグ氏）は、アサを呼ぶとき、アム（娘）、ウチャ（兄さん）と呼んでいた。死んだ娘と死んだ兄のことであるらしい。このスニもかつて病気だったことがあり、その病気は娘と兄が引き起こしたと言われている。病気を治すために白い雄鶏を祭ったという。アサが降りると、スニは震え、踊り、歌った。踊りながら、「やって来い」「鬼をつかまえろ」といった内容の文句をぶつぶつ唱えていた。儀礼後、息子の病気は好くなった。

3) ヴォルジグ氏からの聞き取り

ヴォルジグ氏が行う法事には大小ある。大法事はニュツ（捉鬼の意味）、小法事はニュツゴ（驅鬼、奸鬼の意味）と言う。

大法事のニュツは、5年前、ビモのチュビブハ氏（曲比烏哈）のところでやったことがある。娘が皮膚病にかかり、ニジという鬼が憑いていることがわかった。

ニュツの儀礼過程は次の通りである。①羊か山羊を用意する。土で缶と蓋をつくり、家の入口に置く。犠牲を殺し、頭をばらし、皮をはぐ。羊の頭、皮、肺臓、胸のところの肉を戸口の梁にかける。②さまざまなアサを呼ぶ。この中には山神など多くの自然神が含まれている。阿薩を呼んで鬼をつかまえさせる。このときある言葉を唱える。内容は「高い山にいる山神をはじめとしてすべての神が到来した。神はみな協力して鬼をつかまえる。今宵こそ、鬼が絶望する時がやってきたのである」といったものである。これを激しく、早口で唱え、言葉の力で鬼を追い込む。鬼がやってくると、特別な感覚がある。眼に見えるわけではないが、何となく何かがあったよっているような気がする。③手伝いの者に缶の蓋を占めるよう命じる。これで缶の中に鬼が閉じ込められる。④缶は山中の岩穴に持っていか埋める。凶悪な鬼の場合は沼沢地など水のあるところに深く埋める。

小法事のニュツゴ（驅鬼）は、ついこの前の8月にやった。儀礼を依頼したヴォルンティ氏（俄爾母体）は病気というわけではないが、最近夢見が悪いと言う。ある日山羊を追う夢を見た（山羊を追う夢は不吉であると解釈される）。そこでスニのヴォルジグ氏を呼んで簡単な法事を行うことにした。

儀礼には犠牲として豚一頭と鶏が用意された。まず①ビモのチュビブハ氏に教わった経を唱える。②犠牲を依頼者の頭の上で旋回させる。③食事後「跳神」を行う。跳神には特別な規則はない。ただ自然に体が動き、ふわふわと、体がだるいような感覚を伴う。このときにアサを呼ぶ。

6. 補足：ツモビ（孜莫畢）儀礼

1995年9月24日、美姑語言文字工作委員会は、調査団側の要望に答えて、美姑县城郊外でビモの儀礼を挙行了。彝族の伝統的な習慣として、友人や親戚が何らかの事情で外地に赴く場合、健康と旅の目的が無事果たせることを祈ってツモビ儀礼を行う。今回の儀礼の目的は、我々調査団の健康と調査の成功を祈願するものであった。儀礼を担当したのは、大ビモのチュピラク氏（曲

比拉克), 男性60歳, 白癲, 右格以打郷莫曲古村在住。70から80代続くビモの家柄の出身である。また小ビモとして, チュビラク氏の甥の曲比而汝氏 (27歳), 長男の曲比拉松氏 (28歳) が参加した。この他, 摩瑟磁火氏を始めとする美姑語言文字工作委員会の人達が儀礼進行の手助けをした。以下の説明は, 当日配られたプリント「儀式程序及其簡明意義」と, 巴莫姉妹や摩瑟磁火氏からの解説に基づくものである。儀礼の正式名称は, シワプジワシワジスゴゼ (西俄補日俄西俄擲四鋤再)。用意する犠牲は角のある羊1頭, 雄豚1頭, 雄鶏2羽。神具は, ①ヅチ4本, ②ネネブ (呢呢補) とスゴブ (四狗補) という鬼の2種類の鬼像牌, ③グズ (根惹), ④木片で作った金銀, ⑤鬼を打つ撃石撃棒, ⑥櫛, ⑦草縄, 麻縄, 紅糸, 青糸, ⑧チョビヅツニ, ⑨神枝図 (開莫), (図1) ⑩猫, 犬の毛, 履き潰した靴など。

儀礼は午前10:20に開始した。儀礼の過程を「儀式程序及其簡明意義」に沿って説明する。

- ①ムゴビ (母古此), 煙を放つ。のろしを上げて, 神霊に知らせるという意味。
- ②アルツアース (爾擦蘇), 除穢儀礼。焼いた石を水の中に入れ, その煙でビモや法器, 主人 (当事者), 手伝い, 各種の道具の穢れを払う。またこの時, 主人に木片を入れた籠の中に手を入れてさわらせる。これは金銀にさわったことを意味する。木片は鬼の方に向かって投げる。除穢経を誦する
- ③モソム (莫色木), 主人の姓名を神に報告する。
- ④ムセ (木色), 請神。山神, 川や谷の神, 天神地祇等の神霊を招く。
- ⑤クツクフ (克次克阿), 外界の人が主人に対して投げた呪詛を逆に投げ返す。
- ⑥ディヴィ (迪偉), 大小の鬼を払うための25部からなる呪詞を念じる。④⑤⑥は, ④が大ビモ, ⑤⑥を小ビモが担当し, 同時進行で行う。
- ⑦グルジュ (故勒九)。生きている犠牲を主人の周りに時計の針の方向に旋回させる。羊は7回, 豚は7回, 鶏は9回行う。これは主人の災禍疾病等, よくない事を犠牲に付け, 持っていかせようという意味が込められている。
- ⑧イルゴカ (以爾根嘎)。汚穢を取り除く。その後鬼怪を呪詛し, 犠牲と共に殺す。
- ⑨殺した犠牲を儀礼場に置く。身体の左側を下に, 頭を前方に向ける。
- ⑩モノモサ (莫諾莫沙) 犠牲を神鬼に捧げる。ここで犠牲を解体する。羊の腎臓1つと肝臓, 脾臓, 豚の肝臓, 腎臓, 脾臓, 鶏の肝臓を焼く。これは彝語でシェンフ (沈虎) という。羊の皮と頭は残しておいてビモに持たせる。豚の頭は2つに割って煮る。
- ⑪ウオブ (瓦布)。鬼のために鶏の鳴き声で道案内をするという意味。まず鷲畢神を招く祈語を唱えながら, 鶏を鳴かせる。殺した鶏の肺に竹筒を挿し, 息を吹き込むと鳴き声を発する。次に鶏の来歴を紹介した経を誦し, もう一度鶏を鳴かせる。
- ⑫ワモド (瓦莫朶)。ビモが死んだ鶏の足をつかみ, 入り口に向かって投げる。鶏の頭が外に向いた場合は, 鬼怪は既に去ったという意味, 頭が内側に向いた場合はまだ鬼怪が徘徊しているという意味なので, 再び投げる。
- ⑬ラジシ (拉以西), 献茶の意味。肉汁を木椀に入れ, ビモと神霊に捧げる。その後半煮えの羊

の肩胛の部分捧げる。

⑭小ビモがニニボとスズゴの図を板に描き、裏に符咒を書いて鬼符とする。ニニボは9つの頭を持つ男鬼(図2)、スズゴは片足、片手、片角の女鬼で、両者とも落雷で天上から落ち、天上の病気を地上に流行させたという来歴を持っている。符には、鬼が落ちてきた時の様子を表すものとして、日、月、星、雲、雷光、鬼、木を描く。

⑮ビモに食事を捧げる。ビモはスープの最後の一口を残して、主人に飲ませる。これはビモの神力で主人を守るということを意味している(実際にはやらなかった)。

⑯スグセ(四鈿再)。主人の皮膚病を解除する。主人が鬼に借りている債務を賠償するという意味が含まれている。

⑰ニツプトウ(尼此布斗)、鬼符を投げる。草鬼に犬、猫の毛を結び付ける。投げ捨てた鬼牌は外を向けば吉、内側を向けば、もう一度試みる。投げ捨てた人には、後で主人が水を吹き掛けてやる。

12:40~13:50まで昼食。茹でた羊肉、豚肉を会食する。

⑱ネネプトウ(呢呢布斗)、クリワリ(克利瓦利)とも言う。ネネブを投げ捨てる。病を払い、鬼との因縁を断ち切るという意味。投げ捨てる前に主人は鬼牌につばをはきかける。また首、手、足を鬼牌でこする。

⑲ツチジ(此柴擲)。ツチとは、悪戯好きな小鬼のことで、4つの草鬼で表してある。この小鬼を払う。この後、羊の頭をたたき切り、主人に送る。主人はビモに首に巻いた麻縄を切ってもらう。切った麻縄のうち、4本を草鬼のツチに結び付ける。それに羊の角を結び付け、場内のジグ(吉狗)——鬼座にたてかける。主人は紅糸と青糸で作った縄を持つ。ビモはツチを持ち、呪文を唱えながら、神枝に沿って時計方向に3回周り、鬼を鬼の集まるドプロモ(徳布洛莫)に送る。一方主人の側は、時計とは逆方向に神枝に沿って3回周り、最後に神枝の中央を下から上に上がる。

⑳グリワリ(古日瓦日)、わらや神枝をまとめて外へ送る。これで神霊を送ったという意味。最後に主人が酒を飲み、儀礼は終了。ビモが帰る時は、ビモを送ってはいけないし、またビモは振り向いてはいけないとされている。

7. おわりに

わずか5日間の調査で、彝族の宗教職能者や鬼の観念について体系的な理解を得ることは、当然ながらほとんど不可能であると言ってよい。スニの成巫過程についてはある程度典型的なものを採集できたが、より多くの事例が求められていることは言うまでもない。彝族の病因観と鬼観念に関しては、我々が彝語、彝文字、国際音標のどれをも解さないことが大きな障害となっている。カタカナ表記や漢字表記では、同じものが違う表記で表されてしまうことがしばしば起こり、混乱を招きやすい。また儀礼の個々の名称や鬼の名称に込められたさまざまな意味も読み取ることができない。今後の調査では、少なくともキイ・ワードとなるような民俗語彙だけはできるだ

け原語で採集し、細かい意味を押さえていく作業が必要になるだろう。

- 1 丸山氏の報告に同一インフォーマントの記載がある。
- 2 同上。
- 3 丸山氏の報告に同一インフォーマントの記載がある。
- 4 通風を引き起こす通風鬼スアル（絲爾）は一つではなく、棲んでいる場所や来歴によって、さまざまな種類がある。詳細は巴莫阿依1994, 191～192頁を参照のこと。
- 5 ほとんどのスニが、スニに成る前の一定期間病氣、身体の不調に苦しんでいる。病氣の間に、自分から、あるいは人の説得で、彼（彼女）は自分が神にスニになることを求められていることを納得していく。そしてスニに成ることによって病氣から回復するのである。これが、シャーマンの巫病の典型的な形をとっていることは周知の通りである。馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993のスニに対する聞き取り調査でも、スニの巫病の例が報告されている（馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993: 223, 237, 267頁）。
- 6 本文の6. ツモビ儀礼の中で鬼符に描かれたのと同じ鬼。図2参照。
- 7 スニが巫病の期間に見る夢にはしばしば、スニに成ることを暗示する象徴的なイメージが現れる。たとえば、馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993の中の、甘洛田口区のスニの場合は、夢の中で鼓だと思って拾ったのは柏樹だった。柏樹はスニの使う鼓の材料である（馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993: 267頁）。
- 8 馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993の中で報告している涼山県洪溪山のスニの場合は、口で鶏をくわえた時に用意した鼓と鈴が与えられた。彼は鶏をくわえ、鼓をたたきながら遂に天井まで跳び上がり、地面に落ちて卒倒した。気が付いた時には彼はスニになっていたという（馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993: 234頁）。
- 9 スニの守護神アサは、大きく自然神と祖先、親族神に分けられる。涼山県洪溪山のスニの場合、親族神のアサは死んだ父親と12歳で死んだ妹で、よく夢に現れる（馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993: 233頁）。
- 10 巴莫阿依, 巴莫曲布, 巴莫烏薩1992によれば、ビモとスニの中間的存在はニビツ（尼畢且）と呼ばれる（巴莫阿依, 巴莫曲布, 巴莫烏薩1992: 183頁）。
- 11 巴普村には、もう一人女性のスニがいる。ヴォルジグ氏は、他のスニは「決まりを守らない」と言い、スニ同士の交流はほとんどないらしい。

参考文献

- 巴莫阿依, 巴莫曲布, 巴莫烏薩, 『彝族風俗志』, 中央民族学院出版社, 1992年
馬学良, 于錦綉, 范惠娟, 『彝族原始宗教調査報告書』, 中国社会学出版社, 1993年
巴莫阿依, 『彝族祖靈信仰研究』, 四川民族出版社, 1994年

図1 ツモビ儀礼の神枝図

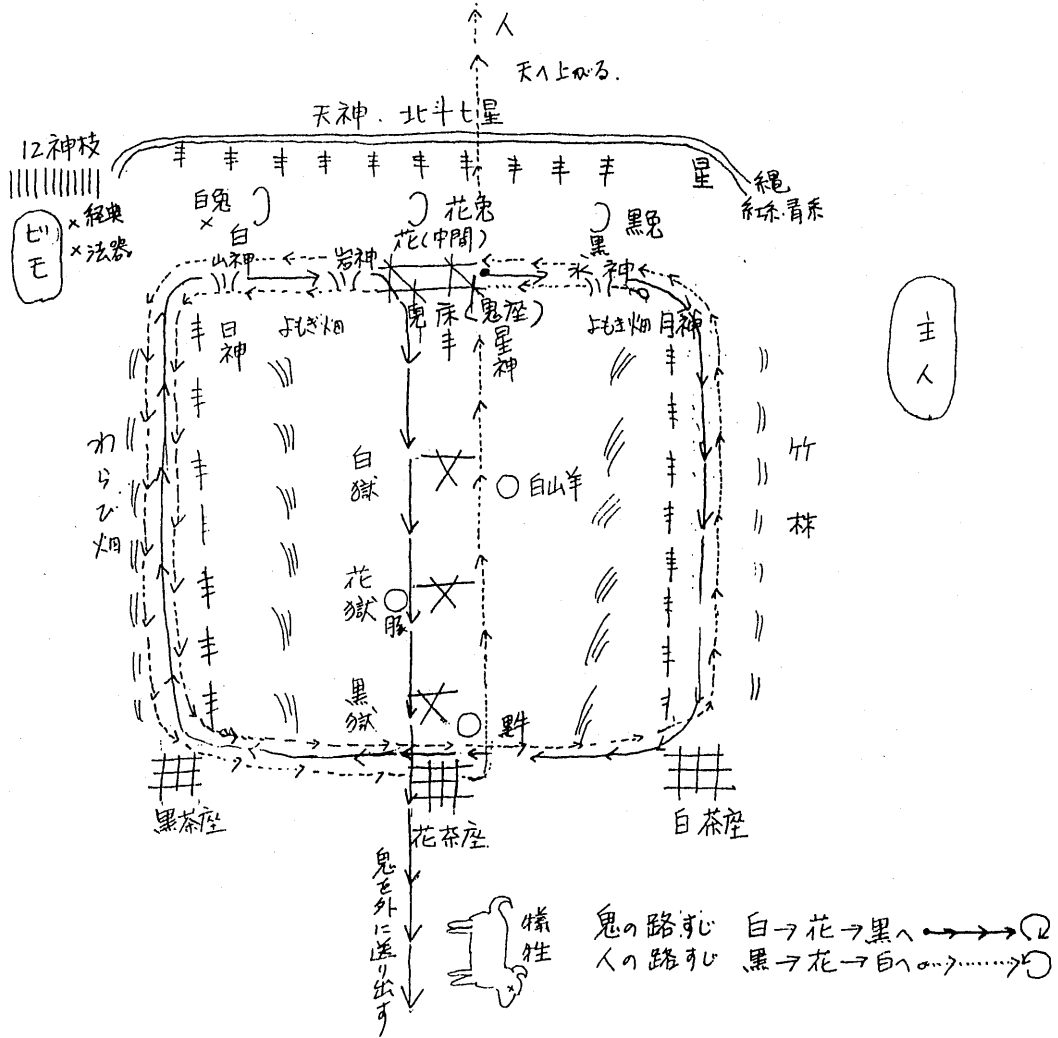


図2 ニニボ

